

「同治と対治」

東井義雄先生の著書『いのちの教え』の中に、次のようなお話があります。

悟君という少年は小学校に入学して以来ずっと登校拒否が続いていました。

担任の先生方が「われこそは、彼の登校拒否を解決して見せるぞ」と色々と手を尽くし、「元気を出せ」と熱心に励ましたのですが、どうにもならないまま六年生を迎えることになりました。六年生の担任は、学校では一番若くて、また気の弱い一面をもった米田先生という方です。

米田先生はそれまでの担任の先生のように悟君に「頑張れ、もっと元気を出せ」とは言いませんでした。

どう言ったかという「悟君、実は僕も気の弱い男で、ほかの人が自分の思い通りに何事もやってのけるのを見ると、うらやましくなってしまう。僕らは自分の事よりも、まず相手の気持ちを考えてしまう。が、考えてみると、これは、悪い事ではなくて、人間として一番大切なことではないだろうか。悟君、お互いに、僕らのこの気の弱さ、もっと大切にしようではないか」と、呼びかけたのです。

米田先生の担任になってから、悟君の登校拒否はぴたりと止まりました。

・・・以上のようなお話です。

ところで、仏教には同治と対治という考え方があります。

「治」は治療という意味です。

これは、例えば発熱に対して、氷で冷やして熱を下げるのが「対治」で、温かくして汗を充分にかかして熱を下げるのが「同治」です。或いは悲しんでいる人に、「悲しんでばかりではダメじゃないか。もっと元気を出せ」と悲しみから立ち直らすのが対治で、「辛いだろうね。よく分かるよ」と、共に悲しみを分かち合い、相手の心の重荷を下ろしてあげるのが同治です。

言ってみれば「対治」は現状を否定するのに対して、「同治」は現状を肯定するところから出発した考え方です。

そして、いろんな場面でどちらが良い結果をもたらすかと言えば、それは「同治」の方です。

時には「元気を出せ。頑張れ。そんな事ではダメだ」と激励したり叱咤すること（対治）も必要ではありますが、共に悲しみを分かち合い、共に涙を流す「同治」の方が治療法としては、はるかに優れているのです。

前述の米田先生の場合は「同治」です。

一方、それまでの担任の先生たちは「対治」でした。

「対治」は、たとえそれが善意に満ちた励ましであっても「登校拒否はダメだ」という考えから出発していますので、その一点において、どうしても悟君と対立してしまうのです。ですから 熱心に励ませば励ますほど、それが悟君には、かえって大きな心の負担になっていたのです。

ここで、阿弥陀さまのお心というものを考えてみたいと思います。

阿弥陀さまには一切の否定がありません。

すべてありのままに私たちを受け入れて下さいます。

「お前は頭が悪いのか。良いじゃないか」

「気が弱いのか。結構、結構」「人生の落ちこぼれか。それで良い、それで良い」

「罪を犯したのか。構わん、構わん」

「目が見えないか。耳が聞こえないか。そのまま一向に構わんぞ。そんなことはとるに足らんことだ」

と、絶対的な受け入れの心があるのです。

何一つこだわりがありません。

この絶対的な受け入れ、絶対的肯定、絶対的な許しこそが、阿弥陀さまの大悲と呼ばれるお心なのです。

「一人漏らさず救う」と言われる所以はそこにあるのです。

これが「同治」の完全なあり方です。

ところがです。

そんな大悲に包まれていながら現実の私はどうかというと、相も変わらず煩惱にまみれた愚かな日暮しを続けています。

大悲に包まれてなお、愚痴が口をついて出るのです。

何ともお粗末な我が身です。

しかし、しかしです。

それでもなお阿弥陀さまはそんな私を、すべて受け入れ、すべて許し「そのままよい、そのままよい」と言って下さいます。

これが私にとって、この上もなく有難いのです。

我が身の愚かさに慚愧しながらも、深い深い大安心の世界が開かれるのです。

これは難度海（渡る事が出来ない）と呼ばれる人生を歩む我々に、計り知れない大きな支えになります。

まさしく「畢竟依（ひっきょうえ）」です。最後のよりどころです。

もし阿弥陀さまの大悲に出会わなければ、不安と焦燥の人生を送らなければならなかったことを思う時、ただただ、この大悲に「勿体ないことです。かたじけないことです」と、頭が下がるばかりです。

阿弥陀さまの大悲に抱かれた親鸞聖人は、その喜びを次のような歌に残されています。

如来大悲の恩徳は
身を粉にしても報ずべし
師主知識の恩徳も
骨を砕きても謝すべし

平成14年4月 「光明寺だより21号」より